



第 42 号
平成26年12月26日 発行
— 発 行 —
埼玉県立がんセンター
発行責任者
病院長
田中 洋一

基本“唯惜命”
理念

私達は生命の尊厳と倫理を重んじ、十分な医療情報提供と患者さんの自己決定権を尊重し博愛と奉仕の精神で医療を行います。

目次

- がんと遺伝 1
- 血液内科ってどんなところ? 2
- 新“臨床腫瘍研究所”の完成をお伝えします 3
- 通院治療センターの紹介～安全に、そして安心して治療が継続できるために～/
栄養部もパワーアップしました! 4



埼玉県のマスコット コバン

がんと遺伝



腫瘍診断・予防科
科長兼部長
赤木 究

昨年の5月、アンジェリーナ・ジョリーは、自らが乳がんになりやすい体質であることを遺伝子検査で確認し、その結果をもとに、乳がんを予防する目的で健康な乳房を切除したというニュースは世界に衝撃を与えました。「遺伝する乳がんがあるということ」、「がんになる前に乳房を切除するという予防の仕方があること」は、あっという間に誰もが知る事実となりました。

そのニュースの後、遺伝カウンセリング外来をやっている私たちのもとにも、「乳がんを発症した家族がいるので、私にも乳がんが遺伝しているのではないか？」などという問い合わせが殺到しました。

確かに、遺伝するがんが存在するのは事実です。しかし、それはがん全体の5~10%程度と推測されています。逆の見方をすれば9割以上のがんは、多少の遺伝的な影響を受けている可能性はありますが、遺伝によらない、主には環境（食事、生活スタイル、加齢、発がん物質や紫外線、放射線などへの暴露等）の影響を受けて発症します。遺伝を疑う典型的な特徴としては、そのがんの一般平均発症年齢よりも若い年齢でがんを発症している（若年発症）、特定のがんを発症している血縁者が多い、一人で何度もがんを発症しているなどがあり、こうしたことに該当する方は、一度、遺伝の専門外来で相談されることをお勧めしています。しかし最近、核家族化により兄弟ですら病気に関する情報がわからない、少子化のためにがんを発症した血縁者の数も少なく、家族に集積しているのか判断がつきにくいなど、遺伝を疑う情報が十分でないこともよくあります。

一方で、技術革新により大量の遺伝情報が比較的簡単に調べられるようになってきました。そのため、血縁者の病気に関する情報がなくても、すべての遺伝子を調べることで、どのような病気になりやすいか、遺伝的にどのような特徴・性質を持っているのかなどの情報を得ることができるようになってきました。こうした情報は、これからの人生や健康にうまくいかせることもあれば、単に不安をあおるだけの情報でしかないこともあり、遺伝子を調べる前には様々な状況についてよく考えておくことが求められます。とはいえ、数年後には、がん診療において治療方針や診断のために、多くの方がたくさんの遺伝子情報を調べるようになるものと予測されます。従いまして、医療を提供する側も受ける側も遺伝子情報について正しく理解し、差別や不利益が起こらないよう適切に対応できるための教育や啓発活動など早急な準備が求められています。



当センターに導入された大量の遺伝情報を解析できるゲノムシーケンサー

血液内科

ってどんなところ？

血液内科副部長 久保田 靖子

血液内科といわれても、ちょっとぴんとこないことと思います。わかりにくい血液内科についてご紹介いたします。

対象となる病気は悪性リンパ腫、急性白血病、慢性白血病、骨髄異形成症候群、多発性骨髄腫など

当院の血液内科では、血液の中に存在する白血球や赤血球、血小板などの血球に異常をきたす疾患のうち、悪性腫瘍に分類される病気の診療にあたっています。悪性リンパ腫、急性骨髄性・リンパ性白血病、慢性骨髄性・リンパ性白血病、骨髄異形成症候群、多発性骨髄腫などがそれにあたります。

皆が憧れる俳優さんが罹患していたという報道はまだ記憶に新しく、急性白血病に冒された主人公が登場するドラマなど、大変な病気であるという印象が強いかもしれませんが、しかし、近年のこの分野の治療の進歩はめまぐるしく、一部の疾患は適切な治療によって治癒が期待されます。また、新しい治療法により、より長生きすることが可能な疾患も増えています。



治療にあたっては、敵をよく知り、治療の目的を明確にすることが大切

敵を知るということは病気の診断、広がり、進行の状態を正確に把握することにほかなりません。そのためには、腫瘍の一部を切り取って組織診断を行うこと（生検）、骨髄検査、CT検査、PET/CT検査などが必要となります。その診断に

もとづき、治療は抗がん剤による化学療法、放射線療法、造血幹細胞移植等を選択することになります。

一般的に治癒をめざした治療は、より強力であることが多く、副作用も強くなる傾向があります。一方、病気の進行を抑えて、より長生きすることをめざす場合は、あまり体に負担のかからない、副作用の軽い治療が望ましいと考えられます。近年は、治癒を目的にする治療でも、副作用が軽いものが開発されつつあります。さらに、治療による重篤な副作用を避け、少しでも日常生活に近い毎日を送りながら治療が続けられるように支持療法が重要となります。その中には悪心嘔吐対策、感染予防対策、輸血療法、精神的なサポート、栄養療法などが含まれ、ほかの医療スタッフとともに対応しています。治療の目的を明確にし、期待される効果に見合ったリスクであるかを見極め、治療を選択することが大切です。

現在3名の医師が、適切な治療の提供のみならず、新たな治療法の開発を行いつつ診療にあたっています。他にたがわず医師不足のあおりを受け、医師の増員もままならないため、四苦八苦の毎日ですが、患者さんとともに病気を克服すべく立ち向かっています。



主な治療法	
悪性リンパ腫	低悪性度： 経過観察・化学療法・放射線療法 中・高悪性度： 化学療法±放射線療法
再発悪性リンパ腫	化学療法・造血幹細胞移植
急性白血病	化学療法・造血幹細胞移植
慢性白血病	化学療法・経過観察
多発性骨髄腫	化学療法・放射線療法 造血幹細胞移植

新 “臨床腫瘍研究所” の完成をお伝えします

臨床腫瘍研究所長 上條 岳彦

埼玉県立がんセンターの皆様、埼玉県病院局の皆様のご高配を持ちまして、新 “臨床腫瘍研究所” が完成いたしました。工事は7月31日に終了し、8月1日にがんセンターへ引き渡しとなりました。しかし、その後に給湯管からの漏水が生じて補修にご尽力いただき、10月から研究員の移転を再開し、10月中には移転を完了いたしました。新研究所の入っている研究棟（旧東館）には、看護部の研修施設（6階）、保管庫（4、5階）が含まれ、1-3階が研究所となっています。1階にはSPF（specific pathogen free）動物施設が整備され、今後は遺伝子改変マウス、免疫不全マウスなどがん研究に欠かせない動物実験が可能となります。また、チップスキャナ等のゲノム医療に必要な新規機器も導入され、さらにバイオバンクプロジェクトに重要なフリーザーと温度監視システムも整備されております。今後はこれらの新規設備・機器を活用し、パーソナル医療の実現に貢献していきたいと所員一同願っております。

臨床腫瘍研究所メンバー



超低温フリーザー室



フリーザー室では、PCによる温度監視・警報システムが部屋の温度変化を感知するシステムと、個別のフリーザーの温度変化を感知するシステムとの二重監視の方式で行われています。

バイオバンク稼働時には、重要な試料もこのセキュリティシステムで管理されます。



動物舎（SPF）

新しい動物舎はSPF（specific pathogen free）施設として無菌化され、がん移植実験に適しています。



ケージワッシャー



清潔室



飼育室

通院治療センターの紹介

～安全に、そして安心して治療が継続できるために～

平成10年10月に開設されたデイケアセンターは、平成26年1月、新病院開院と共に、通院治療センターと名称を変更しました。病床数は43床から60床（リクライニングチェア36床、治療ベッド24床）へ増床となり、国内最大級の通院治療施設となりました。

通院治療センターは、日帰りで抗がん剤治療などを行う外来部門です。通院される患者さんは年々増加しており、平成25年度の利用患者数は、延べ18,230人でした。医師、看護師の役割分担推進のため、平成23年度から看護師による抗がん剤静脈穿刺の実施を段階的に進めてまいりました。平成25年5月からは、治験以外、全ての抗がん剤治療を受ける患者さんの静脈穿刺を看護師が実施しております。平成26年11月現在、21名の看護師が抗がん剤静脈穿刺認定に合格し、病院長



病院長から抗がん剤静脈穿刺認定証をいただきました

から認定証が発行されています。今後も、患者さんがより安全に治療が行えるよう、更に看護師の静脈穿刺技術の向上を図っていきます。

外来で治療を受ける患者さんにとって、通院治療センターで安心して治療を継続していけるということは、社会生活との両立ができ、生活の質の向上につながります。今後も、看護師による副作用対策や療養生活へのサポートを積極的にすすめ、治療を受ける患者さんを支えていきたいと思ひます。



通院治療センター
看護師長

中山 幸子

栄養部も パワーアップ しました!

私たち栄養部は、治療目的が達成できるよう「食事」・「栄養」の側面から患者さんの治療をサポートしています。管理栄養士3人、調理師4人、臨時職員2人の少人数の部です。

(株)富士産業（職員53人）に給食業務を一部委託し、食べる楽しみを少しでも感じていただけるよう、心を込めた食事づくりを心がけています。衛生管理の強化として

HACCP方式を導入し、予想される危害を最小限にしています。

オーダーメイドの栄養管理を実現するため、嗜好・症状により選択できる「希望限定食」を充実しました。衛生管理と美味しさを両立するため、アクアクッカーを導入し、野菜や果物は生の食感・彩りを保ったまま殺菌し、生物禁止の方にもサラダや果物を提供できるようになりました。漆塗りの食器やユニバーサルデザイン食器も取り入れています。患者さんのお誕生日にはケーキとコーヒーや紅茶のワゴンサービスも行っています。



専用の栄養相談室を設け、予約制によりグループ栄養相談や個別相談を実施しています。

災害に強い厨房づくりの他、防災備蓄食3日分、ローリングストックを含め7日分を用意しています。災害時の熱源も確保し、災害時でも温かいものが提供できるよう整備しています。入院中は何かとご不便をおかけしますが、みなさまに少しでも「ほっ」としていただけるよう、これからも栄養部一同、チーム全員で頑張っていきます。



栄養部副部長

大浜 万知子